

令和7年度 学校評価シート（青梅市立東小学校・東中学校）

＜学校経営方針の重点＞

- 1 学習指導の充実
- 2 生活指導の充実（小学校）、生活・進路指導の充実（中学校）
- 3 情操教育の充実
- 4 小中、学園との連携

項目	経営目標	本年度の重点	具体的な方策	評価	分析結果	改善策	学校関係者評価記入欄		学校の見解と今後の方向性
							評価	コメント	
1 確かな学力	確かな学力を身に付ける教育活動を推進する	指導方法や指導形態の工夫・改善などにより基礎的・基本的な学力の定着と伸長を図る	習熟度別少人数授業（中一英語）やTT（小一国語、算数、理科、体育、中一数学以外一部授業）の充実を図り、分からないところを前の単元に戻って復習をし、繰り返し学習する。	B	A+B 評価 90%で、A 評価が 45%と昨年度の 68%から下がった。学習に苦手意識が強い子が多い。T2を多くの教科で配置したが、個々の実態に応じた十分な対応はできない。	学習の系統性に注目し、学年を遡って復習をすなど、児童の実態に合わせ、個別の課題を精選して学習を進めていくことも行う。	A	児童の特性に応じた「可視化」に重点を置いて「わかる授業」を展開しており、学習に苦手意識が強い児童について、着実に学びの定着が図られている。	T2の配置が拡充された。個々の習得状況に差が大きいので、T2を活用するなど、個々の学習課題に対応し、「できた」「分かった」を実感できる授業を工夫する。
			児童・生徒の考えを引き出し、意見や理由、説明など自分の思いを表現させる。	B	A+B 評価 83%であった。A 評価が 35%と昨年度 41%から下がった。また、D 評価が 4%だった。「しかげづくり」を工夫するなどさらなる授業改善が必要である。	ワークシート等を活用し、自分の考えがまとめられるようにしたり、1 授業単位の中で、全員が発言できるような工夫をしたりしていく。	A	学習の基盤づくりを通して社会性や人間力を育成していく必要性があり、表現力の醸成を通して得られる効果は大きいと考える。	教員一人一人が授業を振り返り、発問の仕方を工夫したりしかげづくりを意識したりして、思考力が高まるような、授業展開を行っていく。
			学習指導要領の「主体的に学習に取り組む態度」を養うため、課題の設定を工夫するとともに ICT 機器を必要に応じて活用する。	B	A+B 評価 96%だが、A 評価は 35%である。	興味・関心、基礎知識を身に付けるために ICT 機器を活用した指導を更に工夫していく。	B	ICT 機器を活用した授業展開については、より効果的に活用するための研修会にも積極的に参加しており、指導方法の向上に期待したい。	ICT 機器を活用して、主体的に学習に取り組めるように、活用する際のルールや活用方法例などを、全体で共有して活用場面を広げていく。
			特別な支援が必要な児童生徒の学校生活支援シートを作成するなど、個に応じたきめ細かな指導を実施する。	B	A+B 評価が 96%だが、A 評価が 27%である。途中転入の児童生徒の見立てと個々の特性に合わせた指導には、時間が必要である。	引き続き、特別支援教育委員会で検討の上、学校生活支援シートを作成し、寮と連携していく。	B	寮と連携して作成した学校生活支援シートを高校生活で活かすため、情報共有を緊密に行い学力の向上につなげていきたい。	寮との連携の際は、顔を合わせた話し合いの場を設けたり、学校生活支援シートを用いたりするなど、児童・生徒の支援に活用する。
2 規範意識と	規範意識と社会性を育む	挨拶・返事・言葉づかい・態度などの基本的な生活習慣の確立を目指す	「ルールとマナーの覚書」の運用を通して、服装や挨拶など教員が共通実践を図り、生活指導を進める。また、不必要な情報交換をさせない指導を徹底する。	B	A+B 評価 96%、A 評価は 44%だった。昨年度の 77%から下がった。教員の理解に差がある。必要があれば確認、協議をその都度行った。	何かあれば、その都度ルールを確認して温度差がないように、全教員が同じ指導ができるようにしていく。	A	生活指導については全教員が同じ指導を展開することで児童もルールやマナーを理解し、安心した学校生活が保障される。	形骸化しないよう、教職員の生活指導上の温度差を緩和する手段として、確認を怠らないことと、校内での在り方の研修を行っていく。
			「ルールとマナーの覚書」を活用し、児童・生徒のセルフチェックを通して、常識や良識を養う。また、授業態度の振り返りも行う。	B	A+B 評価が 100%、A 評価は 70%だった。昨年度の 48%だった。学期末の生活アンケート結果を、始業式の際にフィードバックしたことにより意識づけができた。	指導にあたって、細部での確認が必要なことがあったので、事前に想定を行い、確認をする。フィードバックは、継続して行っていく。	B	セルフチェックを定期的実施し、理解を促す働きかけを行うことで児童が安心して学校生活を送れるよう定着させて欲しい。	規範意識が醸成できるよう、教員一人一人が意識を高め、児童・生徒の対応にあたる。指導に温度差が生じないようにする。

社会性	教育活動を推進する	進路を希望し、労働観を形成する	毎日の日記指導や個別指導を通して児童・生徒理解を図り、いじめや他児からの威圧行為のない安定した学校生活となるよう支援する。	A	A+B 評価が 100%、A 評価が 70%と昨年度同様に高い評価だが、児童生徒間でのトラブルとなりがねない言動はゼロと言えない状況はある。	児童生徒理解につなげるためにも、個別対応の時間を大切にし、信頼関係を築いていく。自己有用感を高めていけるよう、一人一人への声掛けを増やしていく。	A	きめ細かな対応から児童のやる気を引き出し、関係構築に努めており、困り感には学年で協議し、寮との連携を図るなど丁寧に寄り添っている。	日記指導・個別指導の場を活用し、児童・生徒へ適切な指導を行い、安定した学校生活を目指す。威圧的な指導とならないよう、緊張感をもって対応にあたる。
			進路学習を通して将来、児童・生徒が自立した社会生活を送れるようキャリアパスポートを活用し、キャリア教育を進める。	B	A+B 評価が 100%、A 評価が 46%だった。例年のことだが、キャリアパスポートの活用に関し課題が残った。	自立につなげるためにも、キャリアパスポートの活用について、教員間での共有を行う。	B	「職業体験」や「職場訪問」で貴重な体験を積んでいるので、将来を見据えて自立を意識した取組に繋げてほしい。	キャリアパスポートを活用し、児童・生徒自身が、将来のことを考える必要性を、様々な場面で伝えていく。自立した社会生活をイメージできるようにする。
3	豊かな心と体の健康を育む教育を推進する	道徳授業等の工夫・充実、また総合的な学習の時間(小学校)や自立の時間(中学校)における福祉体験活動・自然体験活動・体育的活動などを通して、豊かな心と体の健康を推進する	いの中の日や道徳科の授業、更にSOSの出し方教育を要とし、体験活動を通して生命尊重の教育を推進し、自他の命を大切にすることを育てる。	B	A+B 評価が 91%、A 評価 44%と低い状況だった。SOS の出し方、困ったときの相談をすることには課題が残ったと考える。	個別指導の時間、授業の中等、様々な時間を活用して、心に届く指導を意識して行っていく。	A	具体的な教材を精査し、生命尊重の教育を展開することで児童の傾向や特性に合わせて、学年ごとにテーマを決めて取り組んでおり、理解も進んでいる。	道徳授業に限らず、教育活動全体において自己有用感を高める指導を実践する。日常的な指導、特にエールウイークを活用し、声かけを丁寧に行う。
			ものづくりやおしゃれ村での栽培活動(中1を除く)・自然体験や福祉体験など小学校・中学校各学年の発達段階に応じた体験活動を計画的に実施する。	B	A+B 評価が 96%、A 評価 48%だった。児童生徒が積極的に取り組む姿があった。栽培活動は、生きることに直結している食の生成を体験するため、自立につながると考えている。	実施した体験活動は、有意義ととらえている。小学校では、教科を横断した更なる取組を行っていく。	A	身近な環境資源を活用して自然と触れ合うことで十分な体験活動ができている。引き続き福祉担当との連携を強化してほしい。	栽培および体験活動は本校の特色ある教育活動の1つである。継続して行うことで、自然が自分をつくる一助となっていることを実感させ、児童・生徒の喜びにつなげていく。
			新型コロナウイルス感染症予防対応を軸とした運動会やクラブ活動を推進する。また、教育相談(例えば担任との面談)等を通して、心身の健康の増進を図る。	B	A+B 評価 100%、A 評価 44%だった。昨年度 75%から下がった。児童生徒同士の距離感を感じ、意識的に空けた。また、時間を設けて報告を聴くなど学校全体で取り組んだ。	男女の距離感等にも気を配り、授業内容を考えていく。必要場面でのマスクの着用やアルコール消毒を意識し、教育活動を引き続き行っている。	A	学校生活場面での面談を行うことで、児童は大人との適切な距離感を身に付け、安心感をもってやりとりを学ぶ貴重な機会になっている。	今後も感染症対策を講じながら教育活動を推進していく。状況に応じた衛生観念について、学園と協働して指導していく。
4	小・中および学園職員と連携・協力した教育活動を積極的に推進する	小・中学校および学園職員との児童・生徒の情報交換を密にして、連携・協力した指導を行う	児童・生徒の問題行動について、日常的に寮と情報交換を行うとともに、学寮会を充実させ、連携・協力した指導の充実を図る。また、児童・生徒の善行や頑張っていることなどを寮と共有し、双方で誉め、自己有用感を高める。	A	A+B 評価 91%、A 評価 57%だった。寮と情報交換を密に行うことはできている。しかし、お互いに情報共有をしている中でも、内容の認識にずれが生じているように感じる。	引き続き、寮との情報交換を丁寧に行う。一人一人の特性に合わせた指導と支援の徹底を継続して行う。	A	様々な課題を抱える児童について、情報交換や収集、特性に合わせた支援方法の共有について十分なやり取りができている。効果的な支援に結び付いている。昨今、小学生の入所が大変多く、教室内も切迫した現状である。個別の関りも難しい中であるが、先生方が奮闘しながら支援を行っている。	個々の特性に応じた指導を重視する。問題行動に注視してしまうが、善行についても寮と共有していく。寮と連携した指導により、自己有用感を高めていく。
			月に一度の「授業公開週間」や日常の授業参観を通して、学園に児童・生徒の実態を把握してもらい、意見や感想を改善に生かす。	B	A+B 評価が 83%と低い、A 評価は 57%である。児童生徒の様子やどの程度、伝わっているかの検証が難しい。	公開週間に限らず、参観して下さる寮の先生方が増えた。授業を参観していただいた後に意見をうかがうなど、寮職員と話をする機会を増やすことで改善につなげていきたい。	A	授業公開週間に限らず、日常的に授業の様子を観察できる状況である。課題があった場合にはサポート会議を実施することで寮との連携・協働が図られ、一体感をもって解決に向けて協議している。	いつでも学校生活の様子を見ていただき、そこから児童・生徒理解につなげられるように、情報共有できる環境づくりに努める。サポート会議を実施し、児童・生徒への指導と支援について共有したことを教育活動に生かす。
			児童・生徒について情報交換やケース会議等を実施して、寮と学校が共通理解のもとで指導に当たり、互いに着地点を見出しながら課題解決や児童・生徒の育成を図る。	B	A+B 評価が 100%、A 評価が 48%だった。学校と寮では児童生徒の見え方や抱えている困難も異なるため、サポート会議を行うことは非常に効果的であった。	寮とサポート会議をもつことで共通理解のもとで指導を行うことを継続する。問題行動が少ない児童生徒の情報交換がしっかりとできるようにしたい。	A	課題解決に向けて学校からの情報提供や児童支援は、自立支援の観点からも大変有用であり、ポイントを精査することで、より効果的な取組を推し進めていきたい。	情報共有を積極的に行い、支援方針会議等に参加する。目指す児童・生徒像を共有し、互いに積極的なコミュニケーションをとり、課題解決を図る。